

第2回広島県総合計画審議会議事録

- 1 日 時 令和元年10月25日（金）午後3時から5時まで
- 2 場 所 広島市中区基町10番52号
広島県庁北館2階 第1会議室
- 3 出席委員 荻田会長，平松会長代理，伊藤委員，上野委員，衣笠委員，國生委員，
牛来委員，坂田委員，坂本委員，佐渡委員，田中委員，長尾委員，
七木田委員，浜田委員，久光委員，日高委員，フंक委員，本多委員，
前田委員，山川委員，吉田委員
- 4 議 事 ひろしま未来チャレンジビジョンに基づくこれまでの取組と成果・
課題について
- 5 担当部署 広島県総務局経営企画チーム地方創生担当
電話：（082）513-2396（ダイヤルイン）
- 6 会議の内容（議事要旨）
（委員）
 - これまで取り組んできた広島のブランドづくりは，本県の観光や産業の振興，移住・
定住などと結びつき，好況の波にもうまく乗って，相乗効果が表れている。
 - 各指標の達成状況については，既に達成した指標をどうするか，また20%未満やマイ
ナスになっている指標をどうしていくか。人口構成の問題，経済のグローバル化の問題，
テクノロジーの問題，さらに災害への対応といった新たな課題を踏まえながら，指標の
選定と目標の水準を考えていく必要がある。
 - 県内総生産や県民所得は重要な指標であるが，広島県は人口が全国12位，県内総生産
は人口当たりで11位，県民所得は12位となっている。
一方，家計の可処分所得は8位と高順位であり，生活実感と密接な指標であるため，
次の総合計画では，こういったものを具体的な目標にしても良いと考える。
（委員）
 - 今 Society5.0 が国を挙げて盛んに議論されているが，都市部と山間部の格差がなくな
るチャンスと捉えている。例えば地域医療の問題にしても，Society5.0 の技術を使えば，
これまで医師一人必要だったところを0.5人で対応といったことができる。過疎地域の交
通も自動運転などが実現すれば，高齢者が運転免許を持っていなくても不自由しない。

こういうことを県の計画の中に入れ、政策を推進してもらいたい。今までの発想を捨てて、田舎も東京と同等なのだという考えで、まちづくりを進めてもらいたい。

- 企業誘致について、今後は、企業に来てもらうのではなく、仕事が来れば良いのではないか。個人的には、市役所がなくても仕事はできると思う。また、子育てをしながら仕事ができる仕組みづくりを進めていく必要がある。
- 学校の問題にしても、過疎化が進行して、子どもの数が減ったら、タブレットなどを活用した教育の議論をするべきであるが、現状は、いきなり統合という話になる。デジタル技術をまちづくりに活かすことが出来れば、格差のない町ができるのではないか。

(委員)

- 移住ということを考えれば、広島教育力、特に乳幼児からの教育力は特徴的であり、それを県外に発信して、子育て世帯の移住につなげてはどうか。それは人口増に非常に直接的に関係すると考える。
- 外国にルーツのある子どもの実態がなかなか捉えきれていない。これは将来的に大きな問題・課題になると思う。

(委員)

- 人口問題への対応として、産まれる子供を増やすような、女性にばかり負担がかかる状況に疑問を持っている。他地域から広島が選ばれば、子どもを連れた人たちが移住してくる。そうすれば今広島にいる人に気持ち的に負担をかける必要はなくなる。
- 今年、関東で起こったような大雨が降って、ダムを放水するような状況になった時、どの地域が安全なのか、きちんとシミュレーションをして、「広島は大丈夫だから来てください」という、しっかりとしたデータを出してアピールすべきである。そういう安全・安心に資するアクションのある施策ができないか。

(会長)

- 絶対に安全な場所があるかと言われたら、降水量の前提をどう考えるかということが関わるため、「絶対」という言葉は基本的に使えない。減災や防災に対して、自治体と地域におけるデータの共有やデジタル技術を活用した取組を現在も進めているが、住民の皆さんが、災害に対する意識が非常に脆弱と感じる。必ずしも行政のみで考える話ではなくて、県民自身も、どうやって命を守るかということを真剣に考える必要がある。

(委員)

- 近年災害を引き起こしているような降水量は今までにはなかった。絶対とは言えなくても、いろいろなシミュレーションをして、河川が氾濫しないような対策をして、ダムや堤防のことも、事前にチェックして安全を確認する、ということがあるべきではないか。本人が逃げなかったから悪いではなくて、逃げても、家は全然使い物にならなくて、大変な思いをしている方がたくさんいる。そういった不安に対して、ある程度大丈夫と

言えれば、他地域から選ばれる地域になるのではないか。

(委員)

- これまで 1000 分の 1 の確率と考えられていたような大雨を想定すると、堤防を 5 メートルか 6 メートルに上げないといけませんが、財政が厳しく不可能だ。決してハード整備が必要といった声を無視しているわけではないが、市民に啓発しながら、きちんと逃げる仕組みをつくっていかうというのが、今の国の方向である。

(委員)

- 住民に状況を早く知らせるための仕組みを考えていかないといけない。安全なところへ逃げるのが一番であり、安全なところがあるかということは考えなければいけない問題ではあるが、住民それぞれが自分の命は自分で守る、また援助がいる方は、地域の中でしっかり支え合いながら、みんなで早く避難するというのを、常に念頭において身につけるということが、一番大切であるとする。

(委員)

- 避難情報は早いタイミングで出されるようになったが、それぞれの理由で皆がすぐに避難できるわけではない。確実に素早い避難ができるような体制を全自治体で完備していく必要がある。すでに取り組んでいる地域もあるが、例えば、避難所までバスで送迎するとか、独居の高齢者や 1 人で避難ができない人を一緒に避難するシステムをもれなく作っておくことが急がれる。

(委員)

- 防災について大きな問題は都市計画にあると思う。私が住んでいる町では去年、隣の地区が、開発できるように都市計画の設定が変わって、田んぼが全部潰され、コンクリートに変わった。すぐ隣の河川があるが、今年の豪雨で溢れる寸前になった。住宅地にするなら、一部は地下に水が染みるような設計にするなどの指導をするべき。
- 広島県は多くの地域で人口が減っている。人口が減っているのなら、やはり都市計画などを通じて、危ないところから安全な土地に誘導する必要がある。河川の周辺から人を減らすことで、河川にもう少し余裕を与えて、河川が溢れても良いような場所をつくらなければならない。

もちろん避難も必要であるが、災害を防ぐ方向で都市開発をするという方向性を考えた方が良く考える。

(委員)

- 県の財政は限られているので、広島を魅力的にすることで、できるだけ多くの人に広島に来てもらい、広島が発展するための施策に特化しなくてはならないと思う。
- ファミリーが広島に来るような施策が良い。一度に人数は増えるし、教育面が充実していれば、長期的に卒業するまでいてもらえる。これまで議論してきたことすべて大切

であるが、全部は網羅できないという前提で、広島の魅力を最大限にするために何が一番なのかという方向で考える必要がある。

(委員)

- 子育てをするなら広島、という趣旨のことは他県もうたっている。子育ての中でも、1つに選択肢を絞って、パパやママが「働きながら子育てをする」というところに焦点を絞るといったやり方もある。
- 例えば、広島県では働く女性たちに対して、「育児休業給付金」ではなく「育児給付金」を出す。仕事に戻れば、今までの給料に上乗せで給付金がもらえるもの。その分をベビーシッターに充てられるし、ご飯を作ってくれる家事代行にも充てられる。「女性が辞めずに働き続けることができる広島県」という特化したPR方法もあるのではないかと。そうすることにより、そこにビジネスチャンスが生まれてくるといったこともあると思う。
- 今、中小企業は人手不足でとても苦勞しているが、次期総合計画の策定に向けて、そのことがどう盛り込まれるのか、ということが見えない。課題としては感じていると思うが、あまり大きな手を打たないのではないかと危惧している。
- 「将来にわたって、広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かったと心から思える広島県の実現」の「働いて良かった」の中に、雇用された働き手の方のみの言葉ではなく、それを事業主に置き換えてもイメージできるような、中身について検討してほしい。

(委員)

- 「広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かったと心から思える広島県の実現」が基本理念であることを踏まえれば、その中心は「人」であり、このベクトルは合わせておく必要がある。
- 県の施策を推進するにあたって、県民の共感を得ながら取り組んでいくときに、地域や市町によっても状況は異なるので、自分の身に置き換えて、もう少し分析してみる必要があると感じる。
- 格差の拡大でいえば、雇用形態間であったり、それから男女間であったり、中小企業と大企業の企業間格差も、そこに就労している人がどういう分布なのかという点も、データで押さえる必要がある。

(委員)

- 「広島」という地名は世界的に知名度が高い。歴史的経緯から見ても、平和都市広島、外に開かれた広島、外国人を含めた多様な人々が暮らしやすい広島をさらに推し進めていくことがいいのではないかと。
- 子育て支援について、広島は先進的な取組をしているが、これからはLGBTの人たちや外国人、その家族にとっても住みやすいような対策を整えていく必要があるだろう。
- 病院についても、テクノロジーを活用して多言語・多文化に対応していただければ、広島では、海外からも安心して観光に来やすい、外国人も快適に安心して暮らすことに

つながるだろう。

(委員)

- 今回のビジョンの振り返りに記載してある課題を見ても、外国人の受入れに対する課題が書かれていない。将来に向かって外国人がどうしても必要だということもあるし、外国人の観光客も増え、住む人も増えているので、外国人の定着、教育、社会参画ということは、課題として加える必要がある。
- また、両親の一方が外国人、日本で育った外国人、海外で育った日本人といった多様な背景を持つ人が出てくる視点も必要である。

(委員)

- 幼児教育、子育て支援をしていると、例えば、両親の一方が外国人で、家に帰るとその母国語だけで話をしていて、日本語に全く触れないまま小学校に入る、中には未就学のままという子もおり、それについて実態を把握できていない状況もある。
- 他県の例だが、特別支援学級の半数以上は外国にルーツのある子どもたちで、日本語習得に課題があって、教育に課題が生じて就学ができないという実態があるため、今まさに労働力で外国人が必要だという議論もあるが、それと同時に教育の中でそれをバックアップするようなシステム、広い意味で、外国にルーツのある子どもについて考えて、計画に加えていくべきと考える。

(委員)

- 地域のマイノリティは、外国人だけでなく、ひきこもり、孤立の問題や生活困窮者など、支援の必要な人たちがたくさんおり、福祉の縦割りの制度では、対応できない課題がたくさんある。
- 地域の実情を踏まえて、縦割りの制度では解決できない課題に対する1つのコンセプトとして、地域共生社会というものを国でも打ち出して、住民が主体的に地域の課題を把握し、専門職等と連携して少しでも解決していく方向にしている。
- 今回のビジョンの振り返りにおいても地域共生社会を進めていこうという総括になっており、地域が持続し、地域に住んでよかったと思えるためには、地域が人、物、お金などが地域内で循環していくということも必要になってくるので、良い形で地域が持続可能な発展を目指すという観点を盛り込んでほしい。

(委員)

- 現行のビジョンでは、それぞれの分野が好循環を目指して、1つのものをつくり上げていこうという大きな柱になっているが、それぞれがぐるぐる回るというイメージよりも、それぞれの分野が融合するような部分をどれだけ広島県でつくっていくかということが、非常に重要なのではないか。
- 例えば、農業は「新たな経済成長」の中に位置づけてあるが、地産地消や中山間地域

での雇用，防災など，多面的な機能を持っている。

- 縦割りの部分をどう融合させて，新たな施策として広島県の中のビジョンの中に大きく位置づけていくのか，限られた財源を投入するのは融合したところへ，重点的に物事を進めていくという，そういうビジョンづくりを今後の検討の中に入れてほしい。
- 広島県では，家族農業が 97%ぐらいで，多様性という意味では，他の仕事との組み合わせで農業に従事する人が多い。介護といったところも含めて，「半農半 X」のようなかたちでやっていけるような広島県になると良い。

(会長)

- ある一定の領域の中で，農業などの産業だけではない，介護から見守りといった生活サービスを全て網羅したようなコミュニティというのが，1つの中山間地域のあり方として，我々も伝承しているが，今後どの単位で，どのようにやっていくかということは考える必要がある。

(委員)

- 平均寿命の延伸につながる方法論として，特定健診，特定保健指導の充実ということも加える必要があるのではないか。
- 医師の高齢化が進んでおり，特に中山間地域において，その先生がいなくなった場合，それに代わって従事する人がいない。そういう方面の支援をしなくてはいけないと考えている。

(委員)

- 「乳幼児期から社会人まで一貫した人材育成」ということで，教育が魅力的になれば，人を惹きつけ，若い世代のファミリー層が増えることはあると思うが，一方で，学びの変革で，初等中等教育を受けてきた子どもたちが育った後の学びのシステムが整っているか疑問に思う。
- 初等中等教育を受けた後も学び続けていかないと，今の社会の変化というものには追いついていけないし，暮らしを豊かにするという術を持つことすら難しい中，叡啓大学やイノベーション・ハブは，ある意味一部の人たちの，学びのシステムになっている。
- 一見すると，学びの場に何度も戻ってこられる，生涯学習を支えていくようなシステムに見えるが，実はごく一部の人しか学び続ける仕組みになっておらず，単線型の可能性がメッセージとして高く，教育は青少年期に受けましよう，そのあとはしっかり社会で働いて，そのあと高齢期は医療・福祉の対象となりますというような，メッセージを送るような可能性もあり，中等後教育段階の高齢期に至るまでの学びの仕組みを，しっかり見える形にすることで，一生働きながらも学べる，子育てしながら学べる，それが一生涯保障されるということが，見えてくるのではないか。
- 新しいリカレント教育の場をつくれという意味ではなくて，既に教育以外の分野では，多くのところで学びの場が開かれていると思う。

中山間地域にしても、産業振興についても、福祉にしても、そのための学びの場が、それぞれの分野で開かれている。そういったものをしっかりつなげ、教育という形で見せることで、広島県はリカレント教育の仕組みが整っていて、いつでも学べる、いつでも働ける、そういう伏線的な生き方を応援するというメッセージが送れるのではないか。

現在の書き振りでは、人生の前半で教育が終わってしまうような印象を受けてしまうように思う。

(委員)

- 「新たな経済成長」と「安心な暮らしづくり」、「豊かな地域づくり」の3つを考えるときに、常に多様な人たちがいることを念頭に置いた、それぞれの将来像を入れる必要がある。
- 防災についても、外国人や女性など、全てにおいて多様性を念頭に置いた将来像を立てる必要がある。
- 事業所における指導的立場に占める女性の割合という指標の進捗が悪く、企業側の体制と女性の昇進意欲が原因と書かれているが、今管理職になりたがらないのは、女性だけではなく、男性も同様であり、背景にあるのは、管理職の働き方を見ると、何も管理職になるメリットがないという、受け止められ方をしている。働き方改革の中に、ただ働く時間を削減するというだけではなくて、抜本的な管理職の働き方も含めた改革を進めていく必要がある。

(委員)

- 前回の議論のまとめでも、人づくりがすごく大きな観点で書いてあり、さまざまな分野における人材育成とまとめられているが、医療・介護、デジタル人材の確保など、どこの部分に特化するかを議論し、注力する分野を絞り込む必要があると思う。

(委員)

- 中山間地域において、「農作物鳥獣被害額が半減」と書いてあるが、実際は離農される方、農業を辞められる方が近年増えてきている面もある。
今後、中山間地域でどのような形で人を残していくのか、またはどのように人を呼び込むのかを検討していくことが大事だと思う。
- 現状は、中山間地域は末期的な状況にある。10年後には、田んぼはほぼ山になると思う。今後新しい展開を見出して、形作りをしていかないと中山間地域に人が残らない。
- 人が住み、子どもを産んで育てられる環境が、中山間地域ではかなり疲弊してきているが、中山間地域に人を引き込むという新しい展開を打ち出すことによって、県全体が変わるのではないか。

(委員)

- 主体の多様化や多様性といったことが軸になれば、これまでのビジョンとの違いも出

るし、また広島が開かれた社会であるということのメッセージが発せられて、多くの人を引き付けるという効果が得られるのではないか。

- 同時に特定の分野に特化する必要性もあり、このバランスをうまく、ビジョンに取り入れられると多くの人を引き付けられるようなものになっていくと思う。

7 会議の資料名一覧

ひろしま未来チャレンジビジョン これまでの取組と成果・課題について